

## ヘイト・スピーチをめぐる言説の落とし穴：被害者不在の言説の構造と背景

著者	瀧 大知
雑誌名	和光大学現代人間学部紀要
巻	9
ページ	123-139
発行年	2016-03-11
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1073/00004070/">http://id.nii.ac.jp/1073/00004070/</a>

# ヘイト・スピーチをめぐる言説の落とし穴 被害者不在の言説の構造と背景

瀧 大知 *TAKI Daichi*

- はじめに：本稿の目的と課題
- 1 — ヘイト・スピーチという暴力
- 2 — 言説における3つの落とし穴
- 3 — 被害者不在の言説の背景
- おわりに：結論と今後の課題

【要旨】近年、日本では近隣諸国との歴史認識問題や領土問題に端を発した排外主義的な傾向が強まり、路上やインターネット上で、おもに在日コリアンをターゲットにしたヘイト・スピーチが行われ、大きな社会問題となっている。このような事態に対してこれまで様々な言説が生まれてきた。

しかし、こうした言説では、ヘイト・スピーチが持つ「暴力性」を問題視することはなく、むしろヘイト・スピーチをする人々が注目されるばかりで、被害者の姿がほとんど見えなくなっているという問題が見られる。

こうした言説を批判的に検討することにより、本稿ではこのような被害者不在の言説が結果として、ヘイト・スピーチを黙認してきた圧倒的多数の無関心層と同様の役割を果たしてきてしまったことを明らかにする。

## — はじめに：本稿の目的と課題

2012年頃から日本では「在特会」<sup>1)</sup>などによるヘイト・スピーチ<sup>2)</sup>が「新大久保」や「鶴橋」など日コリアンが集住し、まとまって生業を行っている地域を中心に繰り返され、問題となっている。こうした事態に対して、国連などからも法的規制の必要性が繰り返し指摘されているにもかかわらず、そうした規制の動きはなく、「表現の自由」の下で放置されているのが現状である。

本稿の目的は、ヘイト・スピーチをめぐるこれまでの言説を批判的に検討し、問題性を指摘することである。これまでの言説は、ヘイト・スピーチが持つ暴力性と、それによる被害の問題を無視、放置することで、「被害者の不在」といえる言説空間を形成し、結果的に、「暴力の黙認」という事態を生み出してきたと考えるからである。

「暴力の黙認」とは、ヘイト・スピーチという目の前の暴力に対して批判を投げかけず、結果的にその行為を認めてしまうような態度を指す。

第1節では、ヘイト・スピーチは、決して表現の問題にとどまらず、現実には深刻な暴力行為として存在していることを明らかにする。第2節では、これまでの言説が陥っている落とし穴を考察し、その問題性を明らかにする。そして第3節では、これまでの言説が「被害者の不在」という事態に陥ったために、暴力の問題を放置し、結果として、ヘイト・スピーチをただ傍観するだけの圧倒的多数の無関心層にこの問題への関心を引きつけることもできなかったということを明らかにする。以上の考察を踏まえ、最後に今後の課題を提示する。

## 1 ―― ヘイト・スピーチという暴力

現在日本社会においてヘイト・スピーチは大きな社会問題となっている。ヘイト・スピーチは、「憎悪表現」と訳されることが多く、最も一般的な訳され方である。

しかしながらこの言葉の理解には大きな問題があった。法学者の前田朗は「表現の自由の問題としてだけ理解するのは、最初からボタンのかけ違い（中略）ヘイト・スピーチとは、差別、暴力、差別扇動、脅迫、迫害、そして抹殺という文脈で行われる犯罪」（前田 2014：116）であると指摘する。前田はヘイト・スピーチ以上に明確な犯罪行為であるヘイト・クライム（憎悪犯罪）の理解への重要性を主張しており、ヘイト・クライムの中にヘイト・スピーチを位置付ける必要があると述べる（前田 2015：17-18）。「ヘイト・スピーチ＝表現の自由の問題」という見方への前田のこうした批判は、ヘイト・スピーチが表現の問題にとどまらず、かつ差別に基づく暴力であることを理解するうえでとても重要なものである。

そして、ヘイト・スピーチの特徴として考えなければならないのは「非対称性」である。ヘイト・スピーチは通常の個人間の罵り合いとは違い、民族的帰属や人種などにおいて、多数派住民とは異なる属性を持つ少数派住民に対する攻撃として現れる。

師岡康子によれば、これまでのヘイト・スピーチ研究の蓄積から、攻撃を受ける側は、「非対称的」な攻撃によって、精神疾患や PTSD などの苛烈な被害を蒙ることが問題視されているという（師岡 2013b：53）。

歴史的に形成された差別構造の中で幾世代にも亘る差別の負の財産を背負わされ、また、日常的に、様々な理不尽な差別を受け、民族的・人格的尊厳、アイデンティティを傷つけられ苦しめられている人々に対するものゆえに、その心身に極めて深刻な害悪をもたらす。（師岡 2013a：211）

また、「属性」への攻撃であるため、「直接ターゲットとされた場合でなくとも、その集団に属する諸個人にも悪影響」（師岡 2013a：211-212）をおよぼす<sup>3)</sup>。

こうした「非対称的」な関係性に基づいて表出するヘイト・スピーチの害悪は、主に（1）

沈黙効果、(2) 差別と憎悪の構造的強化があらわれる。(1) 沈黙効果とは、非対称的な構造の中で攻撃を受けた人々は自己喪失感や無力感を感じてしまい、さらなる被害を恐れて声を上げられなくなることである。これによりヘイト・スピーチを受けた人々は自らの抗弁の権利が剥奪され、当該社会において自分達の力でその立場を向上させることが困難になる(師岡 2013b : 57-58)。

(2) 差別と憎悪の構造的強化とは、ヘイト・スピーチによって差別が当該社会にとって当然のものとなり、より一層強化されることである。その結果、差別が蔓延し、ヘイト・スピーチから物理的な暴力行為へと進み、究極的にはジェノサイドという最悪の形に帰結するとされる。そのような例としてはナチスのユダヤ人迫害からホロコーストへという流れや日本における関東大震災の朝鮮人虐殺の事例が挙げられている(師岡 2013b : 61-64)。

1923年の関東大震災における朝鮮人虐殺は、地震によるパニックのなかで官憲などが、朝鮮人が暴動や放火を企てているとして流したデマが、朝鮮人に対する民衆の差別や偏見を増長させ、結果的には虐殺行為へ発展してしまったものである。これは、ヘイト・スピーチがジェノサイドを生み出した典型的な事例として理解できる。ヘイト・スピーチは「社会的排除と将来における差別的動機に基づく暴力をひき起こす」(金 2014 : 3) ののである。

宝月誠によれば、暴力とは「人びとの間のなまなましい社会的相互作用の一つの形態」(宝月 1980 : 2) である。つまり、暴力を振るう側に対して被害者が恐怖感や抵抗感、逃走というような、その行為に対する拒否の反応を示すかどうかということが暴力行為か否かを判断する一つの基準になる。

また、中村一成(2014)は、京都朝鮮学校襲撃事件において、当時学校でヘイト・スピーチに晒された子どもたちの中には夜泣きや夜尿が始まった子や公園に出たくない泣く子、襲撃者を思わせる作業着姿の大人に怯える子、古紙回収や廃品回収の拡声器のアナウンスに「在特会が来た」とパニックを起こす子もいたことを明らかにしている。その場になかった保護者からは、襲撃されたことには学校側と自分たちにも責任はがあると自責的になってしまう声も上がった。また、刑事告訴翌日に開かれた市民集会でも、少なくとも保護者が「集会にも在特会が来るかもしれない」「もし子どもを連れて行き、あのデモに遭遇してしまったら……」といった不安から参加を取りやめている。

ここにあらわれている反応は恐怖や逃走であり、ヘイト・スピーチは十分に暴力に該当するのである。

このようにヘイト・スピーチに晒された側には(1) 沈黙効果、(2) 差別と憎悪の構造的強化という害悪がもたらされる。そのことが意味するのは、ヘイト・スピーチには加害者と被害者両方が明確に存在しており、あくまでも加害／被害という関係で理解しなければならないということである。しかしこれまでの言説は、こうした関係を見逃し、多くの問題を含んだものが多い。それらの言説は3つに分類することができる。これらを次節で取り上げ、それぞれの問題を指摘する。

## 2 ― 言説における3つの落とし穴

### (1) 加害者の被害者化

まずは、「加害者の被害者化」である。ヘイト・スピーチには加害者と被害者がいるにもかかわらず、それをそれとして問題化することなく、加害者（ヘイト・スピーカー側）も何らかの抑圧を受けた「被害者」の立場であり、その鬱憤を晴らすはけ口として他者への攻撃に走ると理解を示す見方である。

ヘイト・スピーチに関する多数の著作を発表している安田浩一が『ネットと愛国』（2012）を出版した段階での視点は「加害者の被害者化」の典型的な例であるといえる。安田は「在特会」が登場した理由について、非正規の増加・雇用の流動化により「所属」（アイデンティティ）を失った人々が増加し、そうした人々の不安や不満が、排外主義的なナショナリズムへと向かわせると論じていた。

人々の不安や不満、排外主義をセットで考えるこうした分析は、安田のオリジナルなものではなく、ヘイト・スピーチをめぐる言説では最も多いタイプである。それらは基本的に排外主義に陥った人々を社会経済的な変化、主に新自由主義やグローバル化による雇用の流動化などによる、ある種の「被害者」として捉える傾向がある<sup>4)</sup>。

そうした分析によって発生するのが、加害者への共感とその結果としての暴力への批判の欠落という事態である。

安田はヘイト・スピーチを行う側の人々と「在特会」の意味について、

社会への憤りを抱えた者。不平等に怒る者。劣等感に苦しむ者。仲間を欲している者。逃げ場所を求める者。帰る場所が見つからない者――。

そうした人々を、在特会は誘蛾灯のように引き寄せる。いや、ある意味では「救って」きた側面もあるのではないかと私は思うのだ。（安田 2012：355）

このように、排外主義運動の参加者を「弱者」として描きだし、そうした人々の受け皿として「在特会」は存在すると、見方によっては肯定的とも言える分析をしていた。

そして、その「弱者」に対して、過去の自分を投影しながら共感を寄せている。

私は、羨ましかったのだ。

楽しかったのだろうな。気持ちよかっただろうな。

その思いがいまでも消えてなくなるな。

青春なんて退屈そのものだ。若い頃、私はずっとそう感じていた。

政治的に早熟だった私は、子どもの頃から「いまとは違う社会」を夢想していた。

本書では孤立していた少年時代の桜井について触れたが、それはかつての私の姿で

もある。(安田 2012 : 361)

こうした気持ちから安田は、「在特会」への批判を躊躇する。

私は彼らを単純に「人種差別主義者」「排外主義者」だと毛嫌いし、一方的に批判することだけは避けたいと思った。そんなスタンスで取材などできない。(中略)「あちら」側にも、それなりのリアリティがあるのではないかと感じることも少なくない。(安田 2012 : 72)

このように安田はヘイト・スピーカー側に対して「弱者」であるという認識を持つことで、彼らに共感してしまい、批判することを自ら避け、擁護するような見解も示すのである。

しかし、安田は在日コリアンのフリーライターである李信恵<sup>5)</sup>との取材体験によって考えを変える。「デモが終わって、僕は彼女に『個人的に攻撃されなくてよかったね』といったのです。そうしたら彼女は泣きながら『何いうとんねん、お前は』と僕に抗議しました。『朝鮮人死ぬ』『朝鮮人、出て行け』っていったやろ。あれは全部私のことやで』(安田/有田/五野井/松本 2013:23)と言われたことに衝撃を受け、以下のように述べるにいたる。

当事者が受けている痛み、被害を肌で感じるようになったのは、李さんの言葉を聞いてからなんです。(中略)それまで私はヘイトスピーチを「言葉の暴力」と考えていましたが、そんな生易しいものではなかった。暴力そのものだと初めて実感したのです。(安田/李 2014 : 89)

実際の被害者の声に触れた安田は、「ヘイトスピーチは人を壊す。地域を壊す。そして社会を壊す。生きていくために、私たちはそれと闘っていかなければならない」(安田 2015a : 265)とヘイト・スピーチに対して明確に批判的な立場をとるようになる。

こうした安田の変化を辿るとわかるとおり、ヘイト・スピーカーを「弱者」と扱うことで「加害者の被害者化」が行われてしまう。その結果、安田は実際に差別に遭う被害者や暴力の実態を見逃してしまい、批判することにさえ躊躇を覚えてしまうという倒錯した議論にはまってしまっていたことが確認できる。

## (2) ヘイトの矮小化

ここでいう「ヘイトの矮小化」とは、「在特会」などのヘイト・スピーチを大きな問題として捉えず、排外主義運動に対して、気にするほどのものではないとして扱い、過小評価をするような見方である。こうした見方は彼らの政治性を削ぎ落とし、多くの場合、「放ってお



いて大丈夫」という結論を招きやすいものである。

排外主義運動を「別にネット右翼や在特会くらいならいい。今のところ、実害もあんまりない。」(古市 2011:184) と述べ、いわば「その程度のモノ」でしかないとみる論者として、若者論で知られる若手の社会学者である古市憲寿を挙げることができる(古市 2010, 2011; 古市/國分 2013)。

「在特会」及び「ネット右翼」などの排外主義的な言動をする人々に対する古市の考えは以下のようなものである。

運動に参加する動機についての古市の理解は、初期の安田<sup>6)</sup>と同一のものである。彼らの「裏側に横たわっているのは承認不足だったり、不安定な労働環境だったり」(古市・國分 2013:135) とする認識であり、かれらが登場してきた背景には不安定な労働環境などからくる承認不足というアイデンティティ不安があるとする。また、「在特会」などの路上へと進出してきた運動体は、承認不足の人々による「相互承認」や「居場所」といった「場」として機能しているとする(古市 2011:186)。

そして「ネット右翼」に対して、以下のように過少評価する。

僕はそこまで心配する必要はないと思います。もちろん暴行や脅迫が行われた場合は刑事事件として対処すべきですけど、どこまで特別視する必要があるかは分からない。

インターネットはガス抜き装置として働くと思うんです。もちろん、それが極端な思想を持った人を集めることにもなるんだけど、大多数の人はツイッターで社会派を気取るだけで満足してしまう。(古市/國分 2013:138)

「相互承認」や「居場所」という機能を持った社会運動にはそうした機能「しか」なく、彼らの運動は「その程度のモノ」であるという見方をしている。

さらに、古市は「ネット右翼」を「その程度のモノ」として捉える理由として、「共同性」の優先による「目的」の「冷却」があると指摘する。こうした分析は自身のピースポートにおける研究にもとづいている。

ピースポートに参加していた人々の特徴は、どんなに高い志をもった人であっても、そこで得られた人間関係を通じて、それまであった「目的性」より友人関係などの「共同性」を優先することだという。その熱はやがて「冷却」され、結果的に「目的性」をあきらめさせる。また、古市によれば、『承認の共同体』は、社会運動や政治運動への接続性を担保するどころか、若者たちの希望や熱気を『共同性』によって放棄させる機能を持(古市 2010:244) ち、「目的性」である「セカイヘイワ!」はあくまでも「ネタ」にしかすぎないという(古市 2010:234)。

このような、「共同性」による「目的性」の「冷却」という知見に基づいて、排外主義運動を分析し、かれらの存在はあまり気にするほどのものではないと論じる。

僕は、かつてピースボートに乗船する若者を対象とした研究で、「共同性」が「目的性」を「冷却」させると結論した。(中略)

どんなに過激に見える集団であっても、そこが「居場所」になれば当初の過激な目的は「冷却」されてしまう。もしも「居場所」が見つからなかったとしても、束の間<sup>つか</sup>の「祭り」を繰り返すだけなので、それは社会にとって大きな脅威にはならないだろう。(古市 2011: 186)

一方、社会運動論的視角から「在特会」へのインタビュー調査をし、排外主義運動を研究している社会学者の樋口直人は、排外主義運動に参加する人々が漠然とした不安や不満を持つだけではなく、多くが元々保守的なイデオロギーの持ち主であることを明らかにした。そのような人々が2000年代以降、特に政治の場や右派論壇で活発となった歴史修正主義や隣国を「反日」として敵視する攻撃的な言説の増加により排外主義へと接続され、さらにインターネット等のインフラ整備が成されたことによって運動に参加しやすくなった結果、「在特会」らの運動が生まれ、動員に成功したのだと論じる(樋口 2014a)。

また樋口は歴史修正主義が、「正史の否定としてしか存在しえないがゆえに、『自虐史観』を押しつけるとされる『反日勢力』への憎悪へと容易に転換する。(中略) 外国人に敵意を持っていなかった者が『反日』を媒介として排外主義に取り込まれて」(樋口 2014b: 10) いる上記のプロセスを論理的に説明している。

こうした樋口の指摘を踏まえると、古市が見逃しているのは次の2点である。第1に、現実には「目的性」は生産されつづけていること。第2に、「在特会」とピースボートの参加者の間に集団の凝集性に違いが見られることである<sup>7)</sup>。

現在の日本社会では、歴史認識問題や領土問題など、右派が「反日」勢力との対立として捉えるような問題が政治の場面で常に生産されつづけ、保守論壇誌でも隣国への憎悪を煽る記事が続々と掲載されている。つまり、運動参加者の「目的性」が「街頭と政治でのキャッチボールを通じて強化」(樋口 2015: 122) されているのである。であるならば、「共同性」によって「目的性」が「冷却」されるというメカニズムは作動せず、「在特会」等の排外主義運動の「目的性」は「冷却」されることはないと考えられる。

また、古市も述べているように、ピースボートには多種多様な人々が参加しており、政治性の強い人は全体の中でも決して多くはない。しかし、排外主義運動に参加する人びとは、元々「自虐史観」からの脱却や「反日勢力」の打倒といった、共通した右派的政治スローガンを持って参加している。隣国との摩擦から「目的性」が強化されていく中にあるのは、「共同性」による「冷却」ではなく、むしろ「共同性」による「過熱」が作動していると考えられる。実際に「在特会」の参加者からは、次のような声が上がっている。

自分に共鳴して参加した人がいて、その人に共鳴して参加した人がいる、というこの



玉突き状態は本当に嬉しいですね。(中略) なんととっても会長が最後まで弱音を吐くことなく前に進んでいる姿ですね。トップの威力ってすごいと思いますね。(中略) みんなが桜井化して行って、私もそうだと思うんですけど。(樋口 2012a : 59)

集まっている人っていうのが、基本的には以前から何かやられている方で(中略)、すごい勉強している人とか。なんで、僕最初に在特会に入った頃は、「お前は左翼だ、その考え方は左翼だ」って半年くらいは言われてた。(中略) で、本読んで。で、半年くらいたったらちょっとこの人がまた「こいつちょっとわかってきたな」みたいな顔して。でもその時に、「でもお前は話し方が左翼だ」って。でもそういった感じで話していくのが、お互いの元からさらに勉強して高めあおうっていう。(樋口 2012b : 69)

1人目の「桜井化」<sup>8)</sup>という言い方からも参加することで自分が行動する意義をより強化していることが窺える。また、2人目のインタビューからは周りとの人間関係が濃密になるほど勉強するようになり、さらに排外主義運動へのコミットメントを強くして行っている姿が読み取れる。

要するに、古市は、暴力を包含する差別的、政治的な運動と思想的にも参加目的も全く異なるピースボートという本質的に違う集団を恣意的に「在特会」と同じものとみなし、放置すれば運動は衰退するという事実とは全く異なるメカニズムをヘイト・スピーチの問題に適用することにより、そこにいる集団の強固さや暴力性の問題を矮小化してしまっているのである。

### (3) 「非対称的」暴力への無理解

現在日本で行われている在日コリアンを標的としたヘイト・スピーチでは、日本人という圧倒的多数派に属する人々の一部が少数派である在日コリアンに対して攻撃を行うという「非対称性」が基本的な構造となる。これに対して、日本人同士の、つまり「対称的」な関係にあるもの同士の罵り合いはヘイト・スピーチにはならない。ところが、ヘイト・スピーチをめぐる言説のなかには、これら2つの相反する関係性を無視し、実質上、両者を同一視する言説があらわれている。

例えば、近年活発になっているヘイト・スピーチへのカウンター行動<sup>9)</sup>への評価をめぐって、ヘイト・スピーカーもカウンターも同じく暴力的な存在と見る「どっちもどっち論」がその代表である。

こうしたカウンターは、古くから反差別活動をしている noiehoie が、「理屈が通じない相手に対抗するとなると、もはや実力行使、暴力しかないのです。(中略) もちろん、暴力といってもいろいろな形態がある(中略) さまざまな暴力を使って克服するしかない。もはや冷静な議論などはしてられないと感じている」(noiehoie 2013:48-49) というように、実際には非暴力を貫いているものの、ヘイト・スピーチをしている側に向かって中指を突き立

てる、「出て行け」等々の罵声を浴びせるなど、一見するとヘイト・スピーカー側と同じ言動をとっている。

差別問題を中心に研究をしている社会学者の好井裕明は「在特会」とカウンターとの応酬は「同じような粗雑で乱暴な言葉」(好井 2015:13) であり、「反差別を訴える言葉もまた、排除や差別を叫ぶ暴力的な声と同じ次元で対抗しており、その意味で同じように粗暴で硬直した叫び」(好井 2015:105) であると述べる。そして、「ヘイトスピーチという営みに対して、ただ正面切って、同じ次元で相手を非難し応酬するとしても、それはヘイトスピーチを繰り返す人びとが自分たちの営みの意味をその場で確認し、勢いづく効果をもつだけ」(好井 2015:105-106) であると主張する。

確かにカウンターと呼ばれる人びとは、野間易通が「沿道から大型の拡声器でヘイト・デモに罵声を浴びせ、中指を突き立てた」(野間 2013:211) というようにお世辞にも奇麗な言葉のみによるものではなく、「同じよう」に見えるかもしれない。しかし、「同じよう」と批判することこそが、ヘイト・スピーチの「非対称性」という問題に無頓着な態度であることに気づかなければならない。

また、好井の相手が勢いづくというという主張は、全く現実に則していない。実際には弁護士でもありカウンター活動にも参加している神原元は、カウンターの成果として、以下の5点を挙げる(神原 2014:44-45)。

#### 第1 ヘイト・スピーチの被害の低下

- ・カウンターの声によってヘイト・スピーチがかき消され、またレイシストの攻撃の矛先もカウンターに向けられ、被害者に向けられなくなった。

#### 第2 差別デモの拡大の防止と委縮効果

- ・「帰れ」などの罵声を浴びせることでデモに参加しづらくなり、デモ参加者の減少、「殺せ」等の発言への抑止効果があった。

#### 第3 世論への啓蒙機能

- ・ヘイト・スピーチの問題の本質を世論に訴え、啓蒙する役割を果たした。マスコミがヘイト・スピーチを批判的に報じるようになったのもカウンターの盛り上がりがある。

#### 第4 国際連帯の気分の醸成

- ・「在特会」等の問題は海外メディアでも大きく報じられており、韓国メディアも多く取材に来ていた。その時にレイシスト側だけでなくカウンターの声も取材され、反差別の声を届けることができた。

#### 第5 新しい政治参加のモデルの提供

- ・これまで人種差別に直接抗議をするという経験をもたなかった日本社会において、新しい政治参加のモデルを提供した。

このような評価は決して過大なものではなく、正当なものであるといつてよい<sup>10)</sup>。カウンターが登場以前には神原の指摘のとおり、人種差別に対して一般の人々が直接的に声を上げて抵抗することはほとんど見られなかったからである。このような活動が一般化したことは評価されるべきであろう。

ところが、好井は「在特会」とカウンターの行動に「多くの私たちは、おそらくはついていけないし、ついていこうともしない」(好井 2015:105) という。しかし、実際にはカウンター行動への参加人数は増加している。

さらに、好井の指摘は、自分たちを暴力の問題から外部化してしまっている。

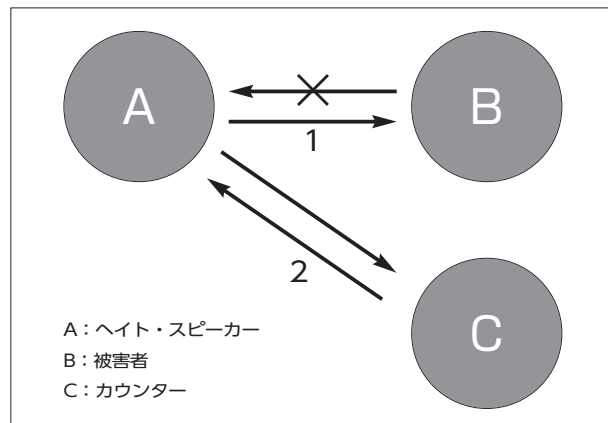
まず行動すべきは、被害者とならないエスニック・マジョリティとしての日本人側であり、本来批判されるべきは好井の言う「多くの私たち」である。ヘイト・スピーチのような差別の問題を自分たちのこと、自分たちの社会のこととして捉えず外部化しつづけ、結果的にヘイト・スピーチの蔓延を許してきた人々こそ批判されるべきではないか。「私たちはついていけないだろう」と、目の前の暴力の問題を無視してきた側が免罪され、目の前にある差別を自分達の問題として受け止め、阻止しようと立ち上がった側が逆に批判されるのは、大きな問題であるといわざるをえない。

また、カウンターの発する言葉も同じように差別的／排除的であるという指摘もあるが、これはカウンターを含めた、ヘイト・スピーチに直接関わっている人々の間における構造を全く理解していないことを露呈するものである。

図1は、ヘイト・スピーチにおける発話の構造を図式化したものである。(A) はヘイト・スピーカーで、(B) はヘイト・スピーチの被害者、(C) はカウンターである。まず、(A) と (B) の関係性については、(A) から (B) への差別的な投げかけは常に一方的になされ、(B) は応答することができないためヘイト・スピーチが成立する。そして、(A) と (C) は「対称的」な関係(抗弁可能)にあるため、ヘイト・スピーチ被害をとまなわない通常の罵り合いになる。この関係であれば好井が言うように「同じような」関係である。しかし繰り返すが、(A) から向けられる (B) と (C) の民族的属性は全く異なり、それゆえに被害者の有無という大きな違いが存在する。

そして、もう1点強調すべきは発話行為の順番である。矢印の下に示した番号は発話の順番を意味する。まず、1の(A) から (B) へのヘイト・スピーチが行われ、その結果として、次に2の(C) から (A) の罵り合いが引き起こされる。逆に、(A) から (B) へのヘイト・スピーチが行われない限り、(A) と (C) が関係することはなく、好井の言う

図1 ヘイト・スピーチにおける発話の構造



「同じような」次元の関係性が成り立つことはありえない。あくまでも、問題の始まりはヘイト・スピーチをする側にあるのである。

また、仮に相手に「出て行け」という言葉を浴びせたとしても同じではない。ヘイト・スピーチにあたる場合は、相手の変更不可能な「属性」に向けられるのに対して、カウンター側からの「出て行け」という言葉にはレイシストや差別主義者という語がその前につき、「レイシスト／差別主義者出て行け」となる。もとより、レイシスト／差別主義者は変更できない「属性」では決してない。

「どっちもどっち論」を述べ、カウンター行動も批判する人々<sup>11)</sup>は、カウンター行動の重大な意義を見落としている。当然ながら、どっちもどっちと言えるということは基本的に図1における(A)と(C)の罵り合いの状態のみであるため、ヘイト・スピーチは存在しないのである。神原がカウンターの意義として述べたように、彼らは自覚的にこうした戦略をとっている。同じくカウンターとして活動する山口祐二郎も、その戦略に自覚的だ。

新大久保の人たちや在日コリアンへのヘイトスピーチではなく、俺らに対する罵倒をさせる。そうすれば、在日コリアンや韓国人の方々は傷つかない。俺らが馬鹿にされることで盾になると考えたのだ。

双方、挑発や罵倒の応酬が続く。時には子供の口喧嘩のようにもなるがそれでいい。多くの人々がその光景を見たら、醜い争いだと思うかもしれない。お互いに唾のかけ合いまでしたこともある。

そうしてでも、差別的なシュプレヒコールを一回でも減らしたかった。差別的なプラカードを一つでもなくしたかった。デモ隊の意識が俺たちに向けば向くほど、在日コリアンや韓国人がターゲットにされないで済む。もともと、バカらしい趣旨で始まったデモが、さらに意味不明なものになる。(山口 2013: 120)

つまり、カウンター行動に立ちあがった人びとの目的は、強引なやり方でも、(A)と(B)における「非対称的」な関係を(A)と(C)の「対称的」な関係にすることにより、ヘイト・スピーチを阻止することなのである<sup>12)</sup>。

こうしたカウンターの戦略による効果を無視してその言行を批判するのは、ヘイト・スピーチの基本的な構造を全く理解していないことであり、それはまさしくヘイト・スピーチ理解の根幹に関わる「非対称的」な暴力という本質的な問題を見落としていることなのである。

### 3—— 被害者不在の言説の背景

これまで見てきたようにヘイト・スピーチをめぐる言説には、初期の安田浩一のようにヘイト・スピーカーをある種の「被害者」と見てしまうことによる「加害者の被害者化」と、それによる批判の躊躇という問題があった。そして古市に見られるように、排外主義運動

の内実を無視し、ピースボートなどの集団と同じものとみなすことで、「その程度のモノ」でしかない脆弱な運動として捉え、排外主義運動の危険性を問題視しない言説もあった。また、好井の議論に代表される「どっちもどっち論」は、ヘイト・スピーチの根幹に関わる「非対称的」な暴力の問題を無視し、カウンターも同じく暴力的な存在として捉えることにより、問題の本質を見えなくしてしまう言説であった。

これらの3つの言説に共通するものは何か。それは「被害者の不在」である。

上述したようにヘイト・スピーチは暴力であり、まずは加害者／被害者が確実に存在することを念頭に置きつつ分析される必要があるにもかかわらず、これまでの言説では被害者がいることが重視されていない。

では、これら「被害者の不在」という言説が生み出され、「消費」されるのはなぜなのか。それは、ヘイト・スピーチを見て見ないふりをする圧倒的多数の無関心層が存在し、彼らによる事実上の「暴力の黙認」があるからであろう。

ヘイト・スピーチの被害に遭う立場の人々の声のなかには、この無関心層の存在が必ずあらわれる。李信恵は、その存在を次のように指摘する。

在特会やヘイトスピーチが生まれた背景には、「あんなものはほっとけばなくなる」「差別問題は面倒くさい、関わり合いになりたくない」という意識があったと思う。実際に私もそうだった。在特会がここまで幅広い支持を広げた原因は、彼らの活動を目にしても、「めんどくさい」、「関わりたくない」と目をふせてきた多くの人々の無関心、無責任にあるのではないだろうか。(李 2015b: 80)

こうした無関心層の存在については、沖縄の人々という別のマイノリティ<sup>13)</sup>による発言からも確認される。同じく「在特会」の攻撃に直面した集会<sup>14)</sup>をめぐる沖縄県知事の翁長雄志は、次のように述べている。

東京要請行動は、初めてオール沖縄ができた瞬間です。一緒に街を行進したのですが、まったく想像だにできなかったことが起きました。日の丸が何本もあがって、沖縄へのヘイトスピーチが行われた。政治的な修羅場は何回も経験しているので、スピーチに驚いたわけではありませんが、道を歩いている人々が誰も足を止めない。これは少しおかしいぞと。ヘイトスピーチは大変問題のある内容を含んでいたので、10秒でも立ち止まってほしかったです。(翁長／佐藤 2015: 22-23)

翁長は、ヘイト・スピーチに対して、ただ見て見ぬふりをしてきた圧倒的多数の無関心層の存在によってさらに傷つけられたという。

このことからヘイト・スピーチを無視し、放置することは、実質的に暴力の蔓延を黙認し、被害者にさらなる2次的なダメージを与えるといえるだろう。



これまでの言説の最大の問題は、被害者という他者を不在にしてきたことである。「被害者の不在」が「在特会」への批判を留保し、カウンターとヘイト・スピーチをする側をどちらもどっちと言って切り捨てる事態を招いたのではないか。いうまでもないが、重視されるべきは、被害者がいるという事実である。これまで多くの言説は、この事実を直視せず、それぞれの関心からしかヘイト・スピーチの問題にふれず、結果的に、暴力の問題を放置してしまったのである。それは、無関心層の「暴力の黙認」という態度と変わらない。したがって、彼らを言説の力によって、ヘイト・スピーチを許さないという社会的なコンセンサスの形成へと引きつけることは期待すべくもない。

無関心層が圧倒的多数を占める日本の状況に対して、「他国で見られるヘイトスピーチへの激しい反応は日本では見られない。どうもこの『社会を成す』ということの意味が、その社会的な本質が、日本では理解されていないようだ。だからこそ、つとに指摘される通り、日本人は他の先進国の人々に比べてずっとこうした社会的差別・社会的排除に『寛容』なのだろう。(中略)日本人にとって差別など所詮『他人事』なのだ」(菊谷 2015: 12) といった菊谷の厳しい批判は、まさにこうした事態を的確に突いている。

### —— おわりに：結論と今後の課題

本稿では、現在までのヘイト・スピーチをめぐる言説を批判的に検討してきた。まず、第1節ではヘイト・スピーチは表現の問題ではなく、加害者と被害者のいる明確な暴力であることを明らかにし、第2節では、安田、古市、好井の言説を批判的に検討することで、「加害者の被害者化」、「ヘイトの矮小化」、そして「非対称的暴力への無理解」という言説のタイプとその問題性を論じた。そして、第3節では、ヘイト・スピーチに対して見て見ぬふりをする圧倒的多数の無関心層による「暴力の黙認」の問題を指摘し、また、最終的にはこれまでの言説は、「被害者の不在」の論じ方が中心となっていたことを明らかにした。

さらに、「暴力の黙認」という視点から検討すると、「被害者の不在」という問題は、結果として目の前の暴力を見て見ぬふりをする無関心層と同じような役割しか果たせず、ヘイト・スピーチ問題への啓発効果も期待できないものであったと言わざるをえない。確かに研究や論評には客観的な第三者的な視点は必要であろう。しかし筆者は、現在のヘイト・スピーチにおける加害／被害が発生する問題を論じる際、まずは被害者を念頭に考察されるべきであると考えた。この当たり前のことがこれまでの言説には欠落していたのである。

その背景として、いわゆる左派論壇において、90年代以降から非正規雇用問題、新自由主義、右傾化批判、オウム真理教の事件などからアイデンティティ不安や承認欲求、共同体の空洞化などのキーワードが乱立し、多くの事象がこうしたクリシェでもって説明されてきたことが考えられる<sup>15)</sup>。また、好井に見られる「どっちもどっち論」は、PC (ポリティカル・コレクトネス) への過度な配慮、そして「リベラル」が常に重視してきた「品性」への過剰なこだわりがその背景にあるかもしれない。



排外主義の嵐が吹き荒れるなかで、今一度これまでの姿勢を問いなおすことが必要になるのではないだろうか。

本稿で充分にとりあげられなかったこうした背景をさらに探っていくことは、今後の課題としたい。

### 〈注〉

- 1) 「在特会」の正式名称は「在日特権を許さない市民の会」。2006年12月に結成。目的は、在日コリアンが保持しているとされる「在日特権」の廃止であるという。ネットで会員を募っており、1万5千人以上の会員がいるとされる。2012年に当時の韓国大統領であった李明博が竹島に上陸したことをきっかけに、それまで以上に活動が過激化。現在もほぼ毎週、デモや街宣が全国各地で行われている。かれらのいう「在日特権」(特別永住権、朝鮮学校補助金交付、生活保護優遇、通名制度など)は、制度などの拡大解釈であり、事実誤認からなっている(詳細については、安田 2012,野間 2015 参照)。例えば、「特権」の筆頭として挙げられる「特別永住権」は、戦前、戦中に日本へ移住した旧植民地出身者に対して、入管特例法に基づいて与えられた在留資格である。1952年のサンフランシスコ講和条約発効時に日本政府は、それまで日本国籍を有していた旧植民地出身国者から突如として「日本国籍」を剥奪した(他の旧宗主国では国籍選択などが認められていたが、日本では認められていない)。その結果、旧植民地出身者は正式な帰属先を失って、事実上無国籍になる。そのような事態に対応するために様々な変遷を辿りながら生まれたのが「特別永住権」であり、それは日本政府による一方的で曖昧な排除政策の結果である。これを「特権」といって糾弾するのは、在日コリアンの歴史を全く理解していないとしかいいようがない。「特権」どころかその生い立ちを考えればただの「資格」レベルのものでしかない。なお本稿では、類似の排外主義運動団体が多数存在しているが、一括して「在特会」と表記する。
- 2) ヘイト・スピーチについて、師岡康子は、次のように説明している。「人種、民族、国籍、性などの属性を有するマイノリティの集団もしくは個人に対し、その属性を理由とする差別的表現」(師岡 2013b: 48)。ここで、師岡が「差別的表現」と述べるのはあくまでもヘイト・クライム(憎悪犯罪)との違いを確認するためであり、そのうえでヘイト・スピーチの本質は「『差別、敵意又は暴力の煽動』(自由権規約 20 条)、『差別のあらゆる煽動』(人種差別撤廃条約第 4 条本文)であり、表現による暴力、攻撃、迫害」と述べて、あくまでも暴力という認識を示している(同: 48)。また、ヘイト・スピーチの表記について、「ヘイト・スピーチ」と「ヘイトスピーチ」の2つがあるが、引用部分以外は基本的に「ヘイト・スピーチ」を用いる。
- 3) インターネットの普及が拡大しているなかでは、ヘイト・スピーチの被害に遭う範囲はほぼ無限大であると考えられる。
- 4) 新自由主義の影響によって被害をうけた「弱者」が、その「弱者」性のゆえに排外主義へと掻き立てられるという見方をする論者は他にも、プレカリアート運動で有名な雨宮処凛やアジア思想史を専門とする中島岳志、ジェンダー研究で広く知られる上野千鶴子などがあげられる。(雨宮/佐高 2010; 中島/姜 2011; 上野 2013)。確かに、上記の論者がいうような理由があるのかもしれないが、しかし「在特会」において問題にすべきは、なぜそれが排外主義、弱者への攻撃になるのかであろう。例えば、雨宮処凛は、自身が右翼団体に参加していた理由として、自身が抱いていた漠然とした生きづらさなどを挙げ、「在特会」の参加者を自身と同様の存在のように語る(雨宮/佐高 2010: 193-194)。だが、国家や体制批判に向かう雨宮と弱者の攻撃に特化していく「在特会」とでは大きく違う。問題にすべきはその「違い」である。
- 5) 李信恵は、現在、「在特会」の元会長の桜井誠や「保守速報」という「嫌韓」「嫌中」的な記事や人種

差別的な記事を掲載する、いわゆるまとめサイトの管理人などを相手に裁判中である。ネット上では彼女へのヘイト・スピーチが絶えず、最も被害を受けている人の一人でもある（詳細は李 2015a,2015b,2015c 参照）。裁判を行うにあたり、「証拠資料を作るために動画やネットを見ては吐き、孤独感にさいなまれて眠れない毎日を経過した。自分を罵るおぞましい言葉の波におびえ、直前まで悩み、逃げ出したいと思っていた」（李 2015b:76）とその辛い心境を語っている。

- 6) 李信恵のこうした指摘を受けるまで、「在特会」に対する批判を躊躇していた頃の安田について、文書や SNS 上でヘイト・スピーチを徹底して批判し、まさしくカウンターを行っている現在の安田との違いを明確にするために、初期の安田などと表記をする。
- 7) 古市は、自分が行った調査のなかでピースボートの参加者について、その理念（「政治性」）に共鳴する「セカイ型」、共同性のみ興味を持つ「文化祭型」、理念には共感するが「共同性」にはコミットしない「自分探し型」、どちらにもコミットしない「観光型」の4つのタイプに分類する（古市 2010:154-160）。「在特会」などと比較できるような大文字の政治性を帯びている可能性があるのは「セカイ型」「自分探し型」であろう。しかしながらそれぞれのタイプを見てもピースボートの参加者は統一したイデオロギーも目的もなく、そうした意味では古市の分析のとおり共同性による「目的性」の「冷却」（解毒？）はされやすいが、排外主義運動の場合は一定程度以上の「目的性」の統一がなされた（「嫌韓」や「嫌中」のような）状態で参加（ネットへのアクセスも含めて）する可能性が高いため、同じく、「冷却」されるものとして見ることは困難であろう。
- 8) 「桜井」とは、「在特会」の立ち上げ人である桜井誠（2014年11月に会長から退任）のことを指しており、「桜井化」とは、会の中で勉強や行動を共にすることで桜井と同じような思想に徐々に全体が近づいて統一されていっていることを表していると考えられる。
- 9) カウンターと一括りにしたが、その内実は様々で、「レイシストをしばき隊」（現：C.R.A.C）を始め、デモに対してプラカードを掲げる「プラカ隊」、KPOP ファンたちによる「K ポペン」等々様ではない。インターネットを見て参加する人が多いため組織的に動いているとは限らない。現場で筆者が話を聞いた人々もネットで知って来たと言っており、また、カウンター行動の最中にその場面に出入りした人々が共感して参加する光景も見られた。ここでは暫定的に、かれらも含めて、総称としてカウンターと表記する。また、排外主義運動に参加する女性たちに焦点を当てた『奥さまは愛国』（2014）の著者である「元在日コリアン三世」でライターの本順梨は、著書のなかでカウンター運動の登場に対して、「どうしてここまで、日本人であるにもかかわらず日などのマイノリティに対して気持ちを寄せられるのだろうか？ 全員とは言わないが、今まで出会ってきた日本人は見て見ぬふりか本当に見ていないか、そのいずれかでやり過ぎす人も多かったのに」（本／北原 2014:221）と肯定的な評価をしている。
- 10) 実際に大きな成果として、新大久保でのデモの開催は現在では、カウンターとの衝突を警察が警戒し許可が下りなくなっている。
- 11) 好井的な「どっちもどっち論」は、ネット上に溢れ返っており、不当ともいえる批判がカウンターの人々に浴びせられている（詳細については、野間 2013 参照）。
- 12) 筆者の観察でも幾度もこのような場面があり、カウンターの人数が「在特会」のそれを上回ると「在特会」の声はほとんど聞こえなくなった。また、始めのうちはヘイト・スピーチを叫ぶのだが、数十分もたたないうちにカウンターへの罵詈雑言に変化してしまうことも何度もあった。
- 13) 「マイノリティ」概念の理解や用い方について、師岡の定義では人種、民族以外に性もその対象とされている。ただし、「マイノリティ」概念の定義や用い方に関する国際比較研究を行った岩間／ユによれば、①国際人権法の「マイノリティ」規定に依拠し、ナショナル、エスニック、宗教、言語に関して多数派と異なる特性を持つ人々に限定して用いる「限定型」と、②これらの人々に女性や障害者、子どもなどの「弱者」一般を加えて「マイノリティ」とする「拡散型」の2種類がある。そ

のうえで「属性」の異なる「限定型マイノリティ」とその他の「弱者」一般を「マイノリティ」として括るのは、適切でない指摘している(岩間/ユ 2007:序章,終章)。ちなみに、本稿で対象としているのは、基本的には在日コリアンという日本における代表的なエスニック・マイノリティに対するヘイト・スピーチの問題である。

- 14) ここでいう「東京要請行動」とは、2013年1月27日の東京日比谷野外音楽堂にて、「オスプレイ配備に反対する沖縄県民大会」実行委員会主催の「NO OSPREY 東京集会」である。集会直後から「在特会」などが「嫌なら日本から出て行け」と罵声を浴びせ、差別的なプラカードが林立した(西岡 2013)。デモ隊の先頭に立っていたのが翁長県知事であり、彼が政府に対して一層強い姿勢を見せる1つのきっかけになったのが、この出来事であったといわれている(安田 2015b)。また、紙幅の都合上詳細な説明は省くが、現在日本において沖縄の人々は先住民族として認定をされていないものの、歴史的にもアイヌと並ぶ先住民族と考えられる。
- 15) こうした例として、「AKBがなかったら、変な話、もっと在特会みたいな連中が増えてると思います。(中略) ネットウヨ的なものというのは、数あるネット上にあふれる『みんなで繋がるための趣味コミュニティ』の一つにすぎない。(中略) 政治的に低レベルなものだとしても、それに参加することで得られる団結感、つながり感は『本物』なのでしょう。だから問題は、彼らのような存在を包摂し承認する、他の手立てが必要なんです。その有力な一つが、僕はAKBだと思っているんですね(宇野/小林/中森/濱野 2012:136-138)といったようにアイドルと「在特会」を同列として語る暴論といえるようなものもある。

#### 〈文献〉

- 兩宮処凛/佐高信, 2010, 『貧困と愛国 増補版』角川書店。
- 古市憲寿, 2010, 『希望難民ご一行様 ピースポートと「承認の共同体」幻想』光文社。
- , 2011, 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社。
- 古市憲寿/國分功一郎, 2013, 『社会の抜け道』小学館。
- 樋口直人, 2012a, 「在特会の論理 (1) — 拉致問題で『舵が切り換った』A氏の場合—」『徳島大学社会科学研究』第25号 p53-63。
- , 2012b, 「在特会の論理 (2) — 『心震える歴史』を経験したB氏の場合—」『徳島大学社会科学研究』第25号 p65-74。
- , 2014a, 『日本型排外主義 在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会。
- , 2014b, 「日本型排外主義の背景 —なぜ今になってヘイト・スピーチが跋扈するのか—」『日本の科学者』本の泉社, 第49号 p6-11。
- , 2015, 「日本の移民政策と反知性主義 市民権の廃墟からの出発にむけて」『現代思想』青土社, 第43巻第3号 p122-132。
- 宝月誠, 1980, 『暴力の社会学』世界思想社。
- 岩間暁子/ユ・ヒョジョン, 2007, 『マイノリティとは何か—概念と政策の比較社会学—』ミネルヴァ書房。
- 神原元, 2014, 『ヘイト・スピーチに抗する人びと』新日本出版社。
- 菊谷和宏, 2015, 『「社会」のない国、日本 ドレヒュス事件・大逆事件と荷風の悲嘆』講談社。
- 金尚均, 2014, 「ヘイト・スピーチの害悪」『日本の科学者』本の泉社, 第49号 p2-3。
- 李信恵, 2015a, 『#鶴橋安寧 アンチ・ヘイト・クロニクル』影書房。
- , 2015b, 「反ヘイトスピーチ裁判の原告として」『社会運動』市民セクター政策機構, 第416号 p74-81。
- , 2015c, 「ヘイトスピーチ提訴」『抗路』クレイン, 第1号 p44-53。
- 前田朗, 2014, 「表現の自由を守るためにはどうすればよいか」のりこえねっと編『ヘイトスピーチって

- なに? レイシズムってどんなこと?』七つ森書館 p112-140.
- , 2015, 『ヘイト・スピーチ法 研究序説』三一書房.
- 師岡康子, 2013a, 「国際人権基準からみたヘイト・スピーチ規制問題」『世界』岩波書店, 第 848 号 p210-219.
- , 2013b, 『ヘイト・スピーチとは何か』岩波新書.
- 中島岳志/姜尚中, 2011, 『日本』河出書房新社.
- 中村一成, 2014, 『ルポ京都朝鮮学校襲撃事件〈ヘイトクライム〉に抗して』岩波書店.
- 西岡信之, 2013, 「沖縄における憎悪犯罪」前田朗編『なぜ、いまヘイト・スピーチなのか—差別、暴力、脅迫、迫害—』三一書房 p107-118.
- 野間易通, 2013, 「社会の変革を妨げるものは何か? 反レイシズム運動の`出る杭を打つ、もの」磯部涼編『踊ってはいけない国で、踊り続けるために』河出書房新社 p206-218.
- , 2015, 『増補版「在日特権」の虚構 ネット空間が生み出したヘイト・スピーチ』河出書房新社.
- noiehoic, 2013, 『保守の本分』扶桑社.
- 翁長雄志/佐藤優, 2015, 「〈緊急対談〉翁長雄志・沖縄県知事×佐藤優」『AERA』朝日新聞出版, 第 1520 号 p22-24.
- 朴順梨/北原みのり, 2014, 『奥さまは愛国』河出書房新社.
- 上野千鶴子, 2013, 『女たちのサバイバル作戦』文藝春秋.
- 宇野常寛/小林よしのり/中森明夫/濱野智史, 2012, 『AKB 白熱論争』幻冬舎.
- 山口祐二郎, 2013, 『奴らを通すな!』ころから.
- 安田浩一, 2012, 『ネットと愛国 在特会の「闇」を追いかけて』講談社.
- 安田浩一/有田芳生/五野井郁夫/松本一弥, 2013, 「〈徹底討論〉差別の言葉をまき散らして憎悪をかき立てる『凡庸な悪』と社会はどう向き合うべきか」『Journalism』朝日新聞社, 第 282 号 p4-27.
- 安田浩一/李信恵, 2014, 「人間と社会を傷つけるヘイトスピーチ」『世界』岩波書店, 第 862 号 p89-95.
- 安田浩一, 2015a, 『ヘイトスピーチ「愛国者」たちの憎悪と暴力』文藝春秋.
- , 2015b, 「どこまでも広がる『敵認定』」『AERA』朝日新聞出版, 第 1520 号 p34-35.
- 好井裕明, 2015, 『差別の現在 ヘイトスピーチのある日常から考える』平凡社.